

昭和63年度

長久手の玩具

長久手町郷土史研究会



9

武者 卍



はじめに

私達、長久手町郷土史研究会の第三部会は戦前の子どもの玩具について収集を進めてまいりましたが、限りある期間の中で満足すべきものではありませんが、まとめて見ましたまだまだ此の外に多くのおもちゃが忘れされ、捨てられたものがあると思います。

玩具は、その時期の子どもにとって、まさに、食事と同じで、子どもの生活の中を掘り深めるための道具であったと思います。

昔のおもちゃは手製の物が多く、親から子え子から子えと伝えつがえられたものと、子ども自身がその時々によって考えたもの、見よう見真似によって作ったものは簡素で素朴なもので、中には廃品を利用して作ったものが、さかんになったり、捨てられたりして時代と共に、うつりかわって行くもので、子どもを取り巻く様々な文化は常に新しいものとなってかわって来たと思います。

最近ではプラスチック製の玩具が市場にあふれ、高価なゲームウォッチが大流行しさらにファミコンに人気がある。

一方今まで忘れられていた昔の簡素で素朴な玩具が見直されて民芸品として市販されるようになってきました。

私達は簡素で素朴な玩具を後世にのこしたく収集をはじめ満足すべきものではありませんが冊子にまとめてみました。

多くの方々の協力を載しましたことを厚く御礼申し上げますと共に今後共、引き続き収集を続けて行きますので宜敷くお願いいたします。

昭和63年10月1日

長久手町郷土史研究会第三部会長

日比野 義 信

長久手の玩具について

目 次

幼児期の玩具	1
郷土玩具の榮	11
玩具の発達	29
少年期の玩具	31
まりつき数え唄	46
中学1年生の短歌	59
母の心	60

私自身が、70才余にもなり 孫もそれぞれ成長して 大学生や高校生にも成長して玩具や オモチャ等ということは 遠い昔のことの様に 忘れていた。その長久手の郷土の玩具について、調査研究して本を発行することにした。簡単な様で、仲々に至難である。最近の玩具は数多く 精巧な物が発売されて 子供さんのある家庭には良いものが多くあるが 本の発刊に際して 明治 大正時代より昭和20年頃までの 戦前までの時代を中心対象にして、調査して発行するものである。

玩具 オモチャというものが何時の時代頃から発祥し 出来てきたかと言う、歴史的な課程は不明で よくわからないが 人が人間生活を営む 縄文時代頃には、人の日常生活の中で 何時か自然に 木や 土や 石で 鳥や 魚を形作り 亦人形型偶像を型作り 原始的な生活の中で 亦 山ノ神 水ノ神等の人の本能的な祭り信仰の中で 形作られた偶像が 弥生時代から古墳時代には多く渡来した。農業文化と 祭祠行事の中で発興していったが、今だに日常生活の中であり 分離独立した玩具とか オモチャの類ではなかったものと思う。5・6世紀頃より中国朝鮮より 造仏工 織工 陶工等の職人 技術や 多くの文化 文物が移入されて北九州地方より 奈良 京都 若狭 近江の地方が 急速に発展して 人の生活もかわる 7世紀奈良時代には 神社仏閣 大寺院等の建立と共に 歌舞音曲が移入して その頃に「囲碁、将棋」等とともに「さいころ双六」が 一般庶民の遊び事として流行したらしく 日本書紀には 持統3年(689)にその遊びを禁止している。亦 続日本紀に天平勝宝6年(754)にも再度禁止している。

又 その頃の 奈良の人びとは 大空を自由に飛ぶ 鳥に夢想して 竹トンボを作り 土製の ハト笛を作っていた事が 最近の出土発掘品により よくわかるので 其の頃より 人間生活の中で オモチャ 玩具の 遊戯類が出現して 流行したと思われる。

8・9世紀 平安時代以降になると 書画 彫刻 陶器 織物等が極度に発達し

て 人の嗜好品が多くなり 平安貴族社会層の中で「けまり行事」が多く 鎌倉、室町時代とつづく中で 庶民の娯楽は 力ら競べぐらいで 他に余り 遊戯的な娯楽はなかったという。

江戸時代も中期頃になると 平和で 豊になり「たこ」「こま」等の多くの 遊び玩具が考察されて 出来てくる。亦その頃より「うどん そば すし 天ぷら」等の 日本食の代表的なものも 江戸の庶民に定着してくるが、田舎地方にはその後期頃のこと 明治 大正時代になると 木製 竹製 紙製やら 土製の玩具、おもちゃの類が多く作りだされてきたが 子供の多くは 自分自身の手で 作り遊だものである。昭和年代にはいと プリキ製 セルロイド製の物が新時代の中にできて 時代の進展と共に 益々多種多様化した。多くの玩具 おもちゃの類が、現在の生活の中にある。

昭和63年9月10日

長久手町郷土史研究会

福岡 鯨 三 書

長久手の玩具

長久手町郷土史研究会第三部会

山 本 鶴 善
中 野 十四夫
川 本 勝 美
浅 井 千鶴子 (表紙題字)
加 藤 正 時
槇 村 信 枝
日比野 義 信

幼児期の玩具

がらがら



子もり唄

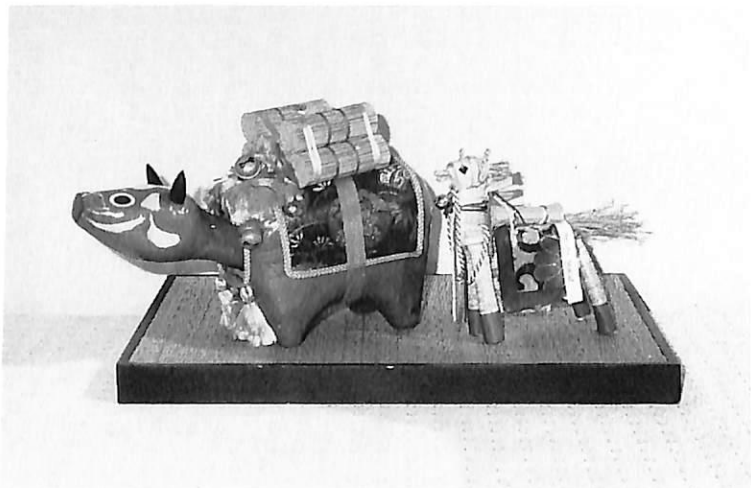
ねんねんころりよ おころりよー
ぼうやはよいこだ ねんねしな
ぼうやのおもりは どこへいった
あの山こえて 里へいった
里のおみやげなにもろた
デンデンタイコに しょおの笛
ねんねこしゃしゃりませ
ねたこの かわいさ
おきてなく子の ねんころり
つらにくさ
ねんころり ねんころり

まいまい



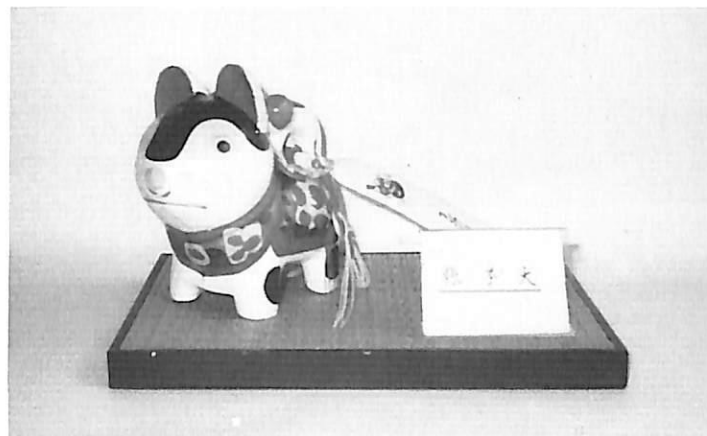
坊やよい子じゃ ねんねしな
張り子の犬でも 太鼓でも
買ってやるから ねんねしな

うしべこ

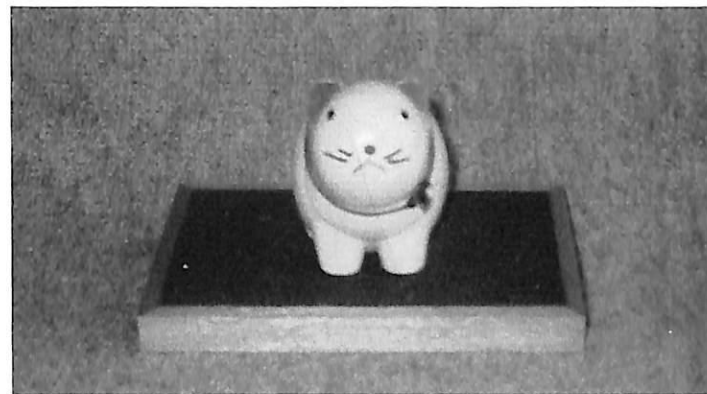


張り子

お宮に初まいりに子犬のようにすくすくと
成長を願う願かけ犬



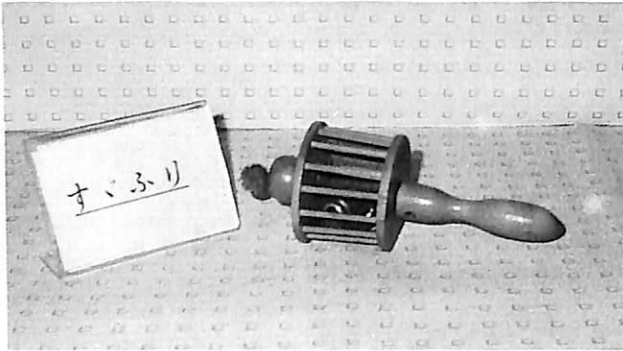
子 犬



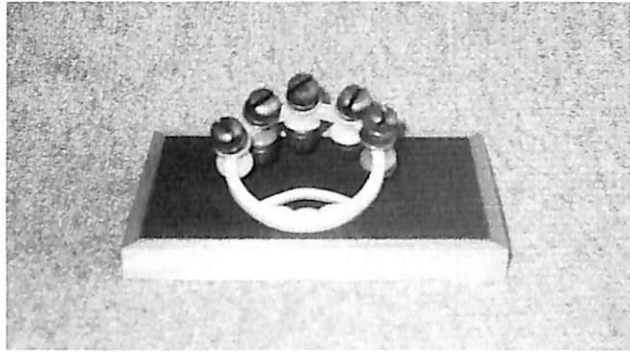
宮まいり

幼児の健やかな成長を祈願して、名古屋の熱田神宮に、村の氏神様に、又は高倉宮の井戸のぞきに、母親の母乳の出の悪い人は、小牧の間々観音に参り祈願した。

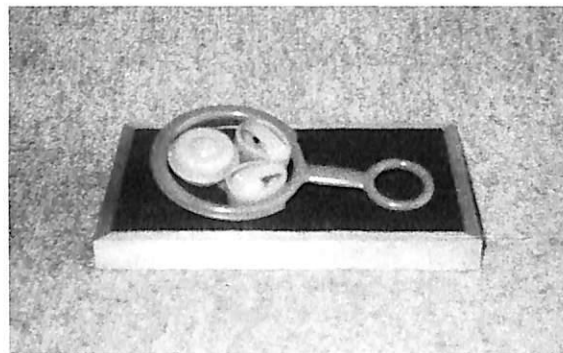
すずふり



すずふり



がらがら



子もりうた
里 よう

ここは やざこか
安昌寺よこか

むかし 蛇のでた

井のはなな

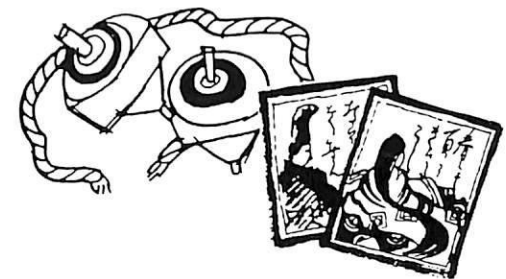
郷土玩具

日本の心がふるさと。愛知県の心がふるさと。

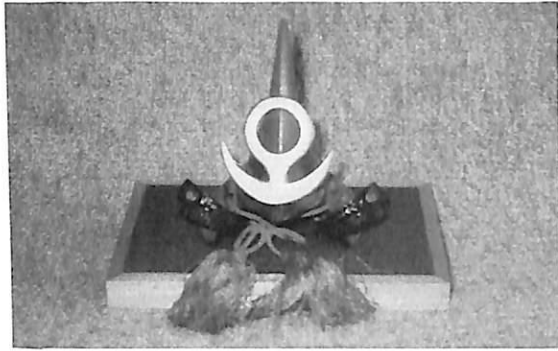
長久手の心が郷土。衣食住総てのものが、時代の変遷にともない180°の転回をいたしました。郷土玩具の研究と聞きました時に幼い頃の思い出が目前に浮び、一人と懐かしく感じました。長久手町の家並も生活も大都会と何ら変りなき状態があります。古きを捨て新しきを求める現在で、どれだけの郷土玩具をみい出す事が出来ますでしょうかと……

会長さん部長さんの御指導のもとに、求め探す再生する部員の方々の御苦勞も大変な事でした。まだまだ掘り下げて行くと手造り玩具の出現がみられるかと思いません。印刷物を御覧頂きますと時代によつての玩具に思いを馳せ、紵の着物にわら草履でタコあげ、コマ回しをした少年時代、おて玉、おはじきをして遊んだ少女時代を思い出して頂ければ幸に存じます。

浅井千鶴子



兜



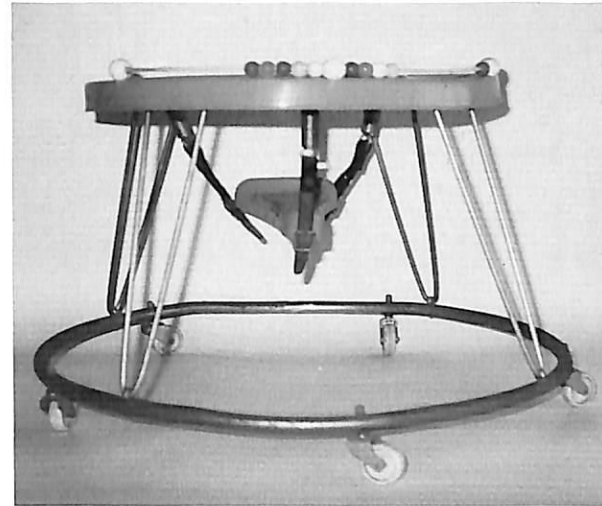
福助



金太郎



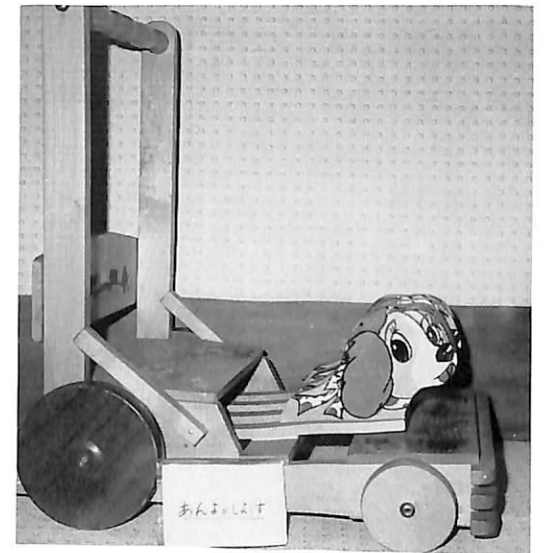
歩行器



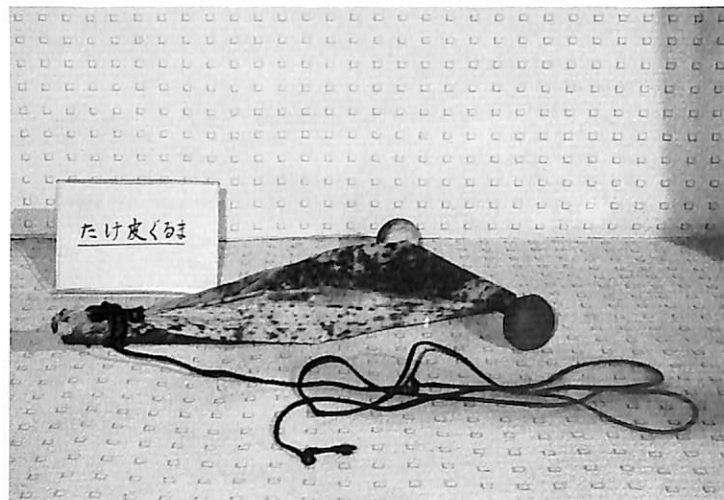
はえば立て
たてば あゆめの
おや心

うさぎぐるま

アンヨはじょうず
コロブはおへた



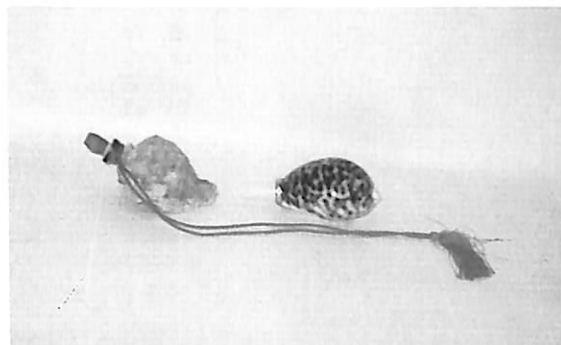
竹かわくるま



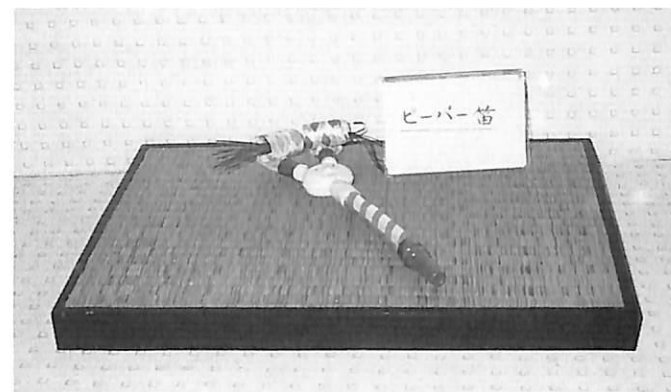
張子の馬



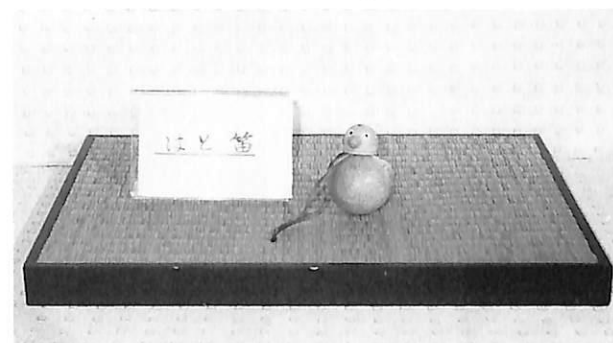
さぎえのふえ



ピーパー笛

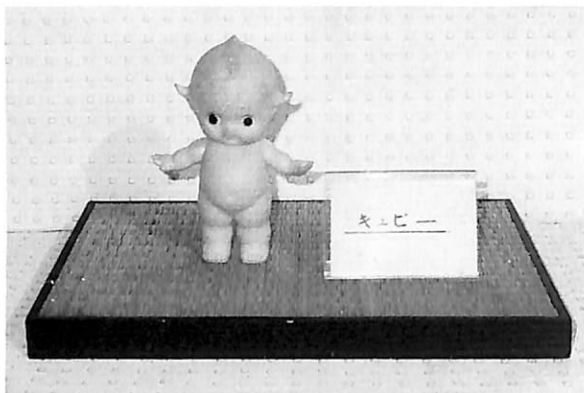


はと笛



一茶の句
我ときて遊べや
親のない雀
やせ蛙負けるな
一茶これにあり
はえ笑え二つになるぞ
けさからは

キューピー

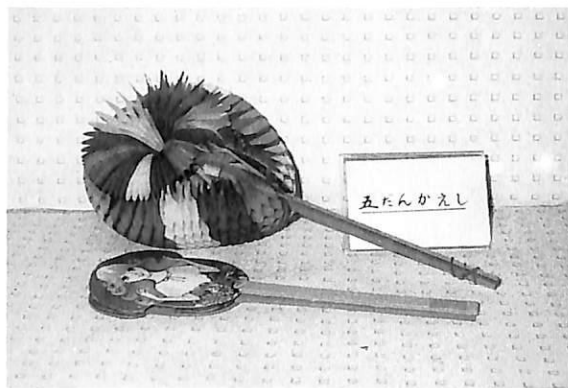


子もりうた
里 よう
やぎこ はんかで
なんぎはさせぬ
娘ないかよ
よめほしい

オルゴール



五だんかえし



郷土玩具の栞

どこの国においても古来より子どもを育てあげる為に玩具として使用されてきた物の中でただ遊ぶための物ばかりでなく、信仰や縁起をおり込んだものもあって一活郷土玩具となし重要されている。

親が子どもを育てあげる気持ちはどこでも変わらず、這えば立て、立てば歩めの言葉のごとく楽しく明るく健康に成長を願うものでそれぞれ年齢に適したおもちゃ以外には何も無い。

それには子どもの成長に伴い好まれる簡素な形と素朴な色彩を施して、そこに尽きぬ興味と教育を盛り込まれている。

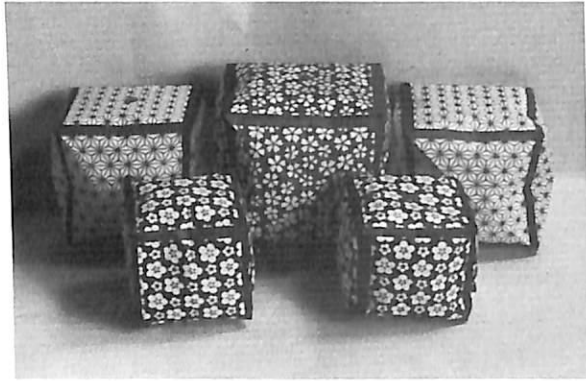
郷土長久手にては戦前物資も少き時代には手作りの竹や木又は葉などで簡単な物であやかり子どもを満足させて居た、外に市売品としてはセルロイド、ペークライト、ガラス、紙(ハリコ)錫、陶器等の製品が多く、現在もたまたま旧家庭の隅に残されている物もあるが土地開発による家屋の改築等にて欲しくも破棄され古い玩具は殆ど姿を消してしまったそれを何とか郷土史研究会にて掘り起こし

生い立ちの古き記憶を辿り無き品は一部手作りをもって復元をなして収集、郷土玩具の歴史として記録した次第であります。

長久手町郷土史研究会員

山 本 鶴 善

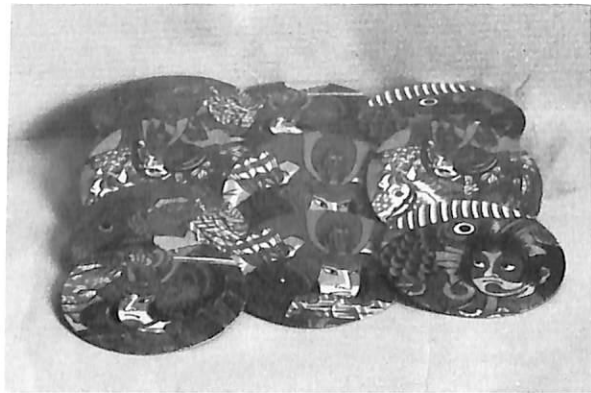
紙角風船



てんてん てんまり てんてまり
垣根を越えて 屋根越えて
表の通りえとんでいった
とんでいった

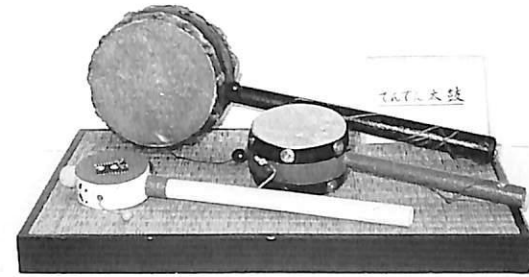


庄屋 (武者絵 金太郎絵)

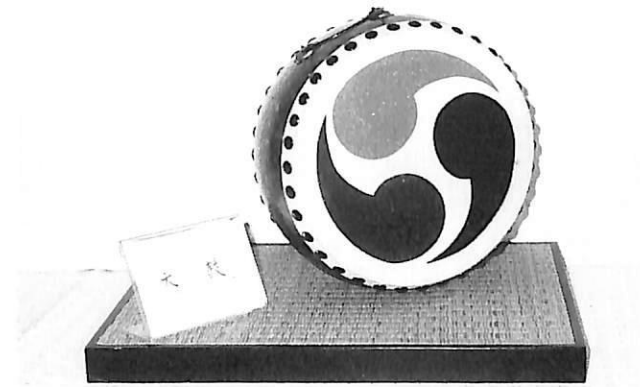


冬の寒い日 正月頃の男の子の遊びごとでした

でんでん太鼓

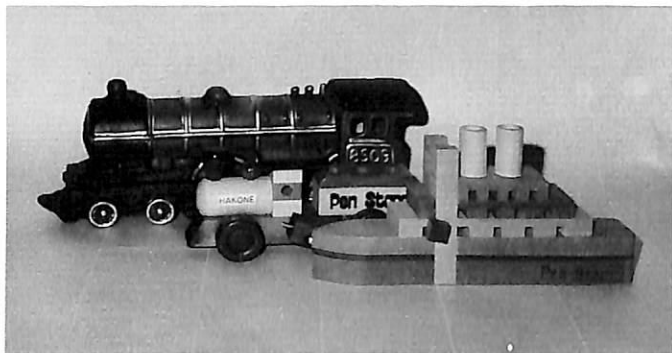


太鼓

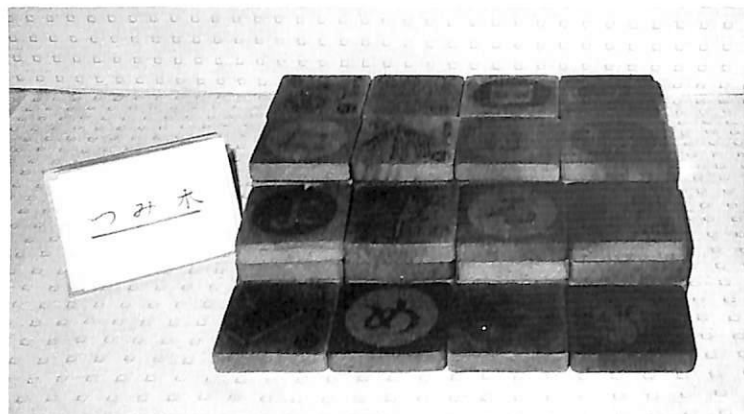


坊やよいこじゃ ねんねしな
里のみやげに なにむろた
でんでん太鼓に笙のふえ

気車と舟



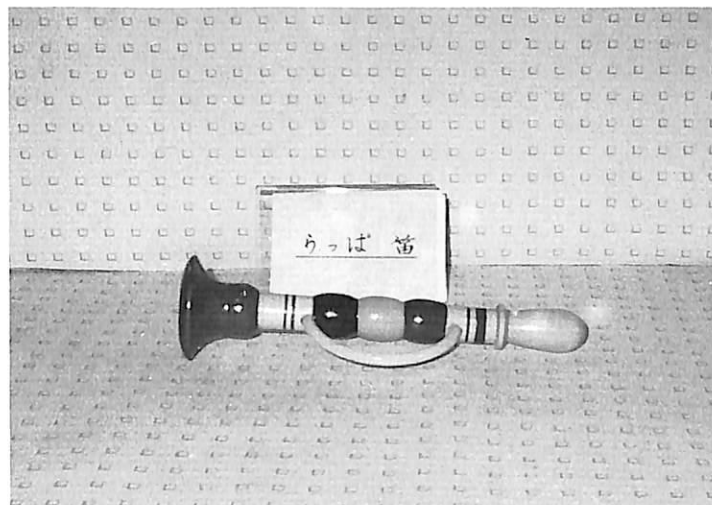
つみき



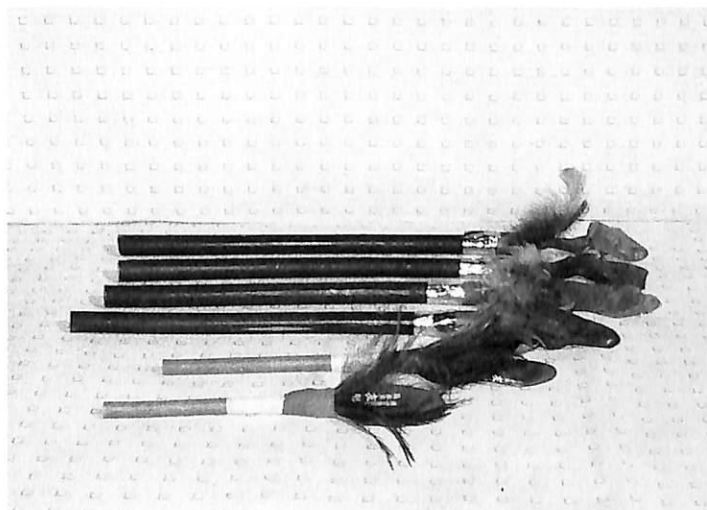
すず



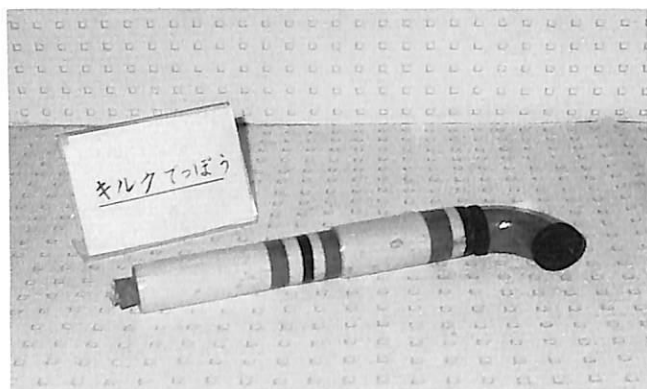
ラッパ笛



風船笛

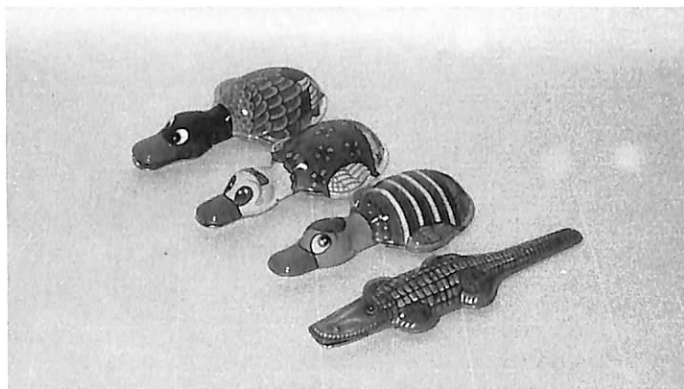


キルクてっぽう

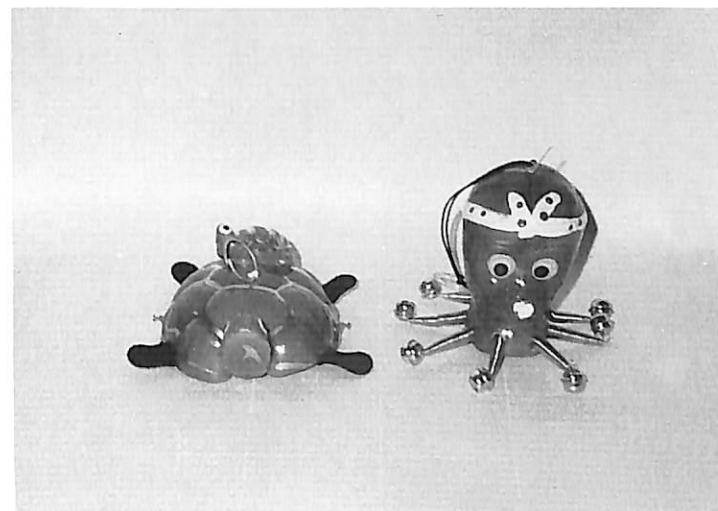


芭蕉の句
 山路きて何やら
 ゆかしすみれ草
 海くれて鴨の声
 ほのかに白し
 此の道や行く人なしに
 秋のくれ

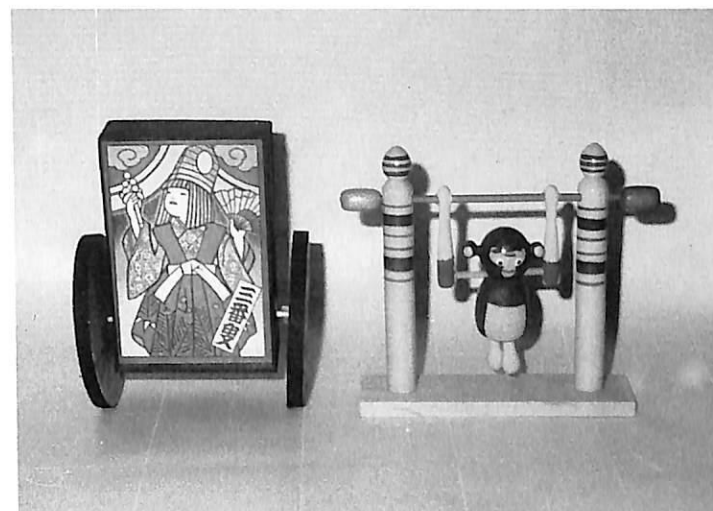
ぺこぺこ



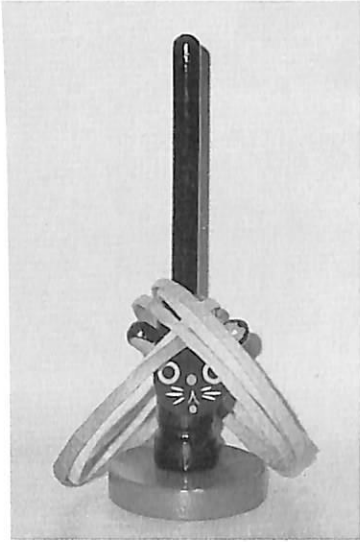
たこおどりとかめ



ぶらんこ

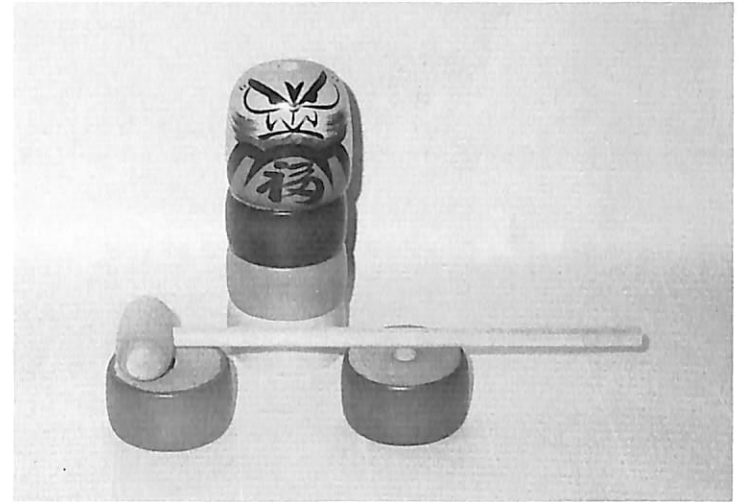


輪なげ

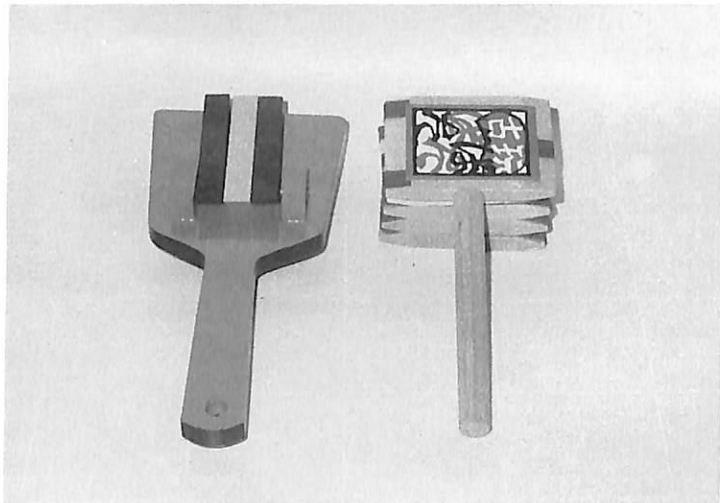


良寛の歌
此の里に 手まりつきつつ
子供らと 遊ぶ春日は
くれずともよし

だるまおとし



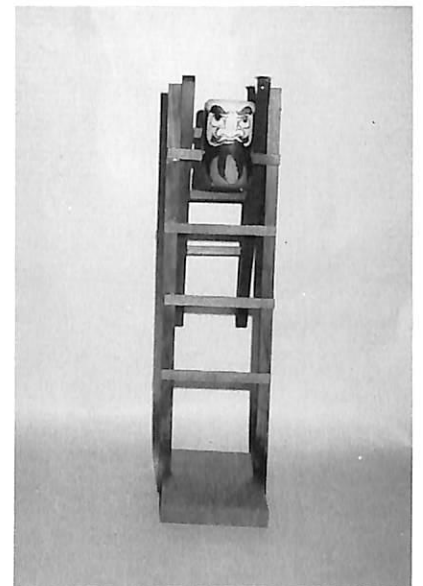
はたはた、ごだんかえし



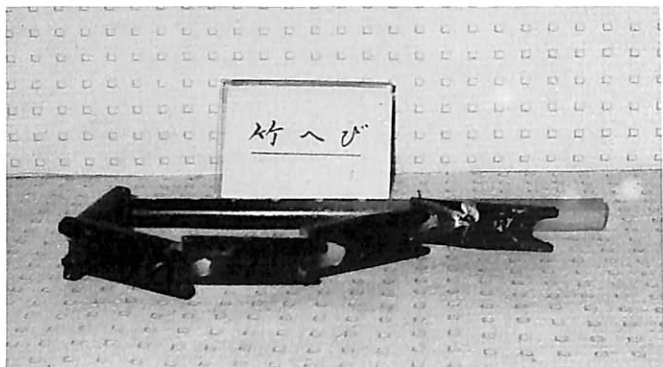
きのぼり猿



だるま落とし

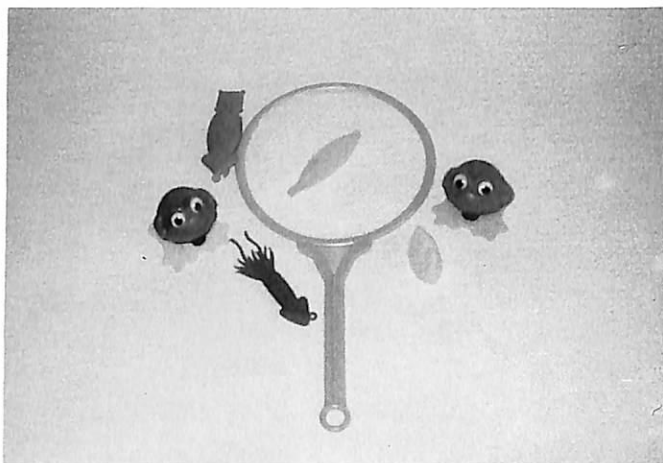


竹へび

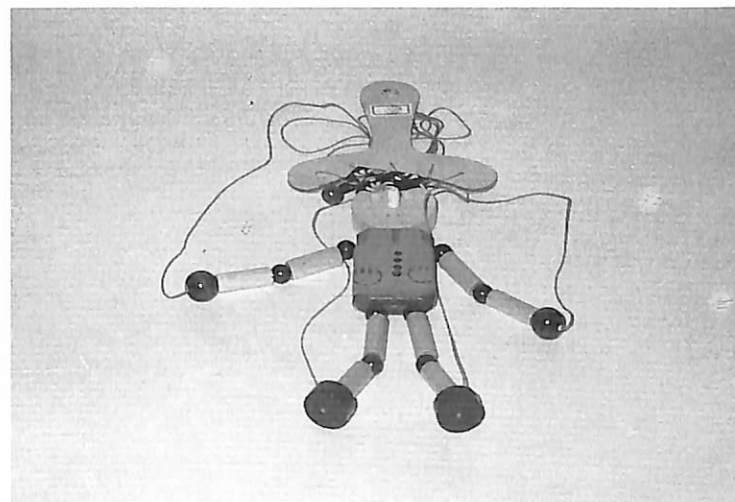


子もりうた
いつか たかやま
ひぼりが ないた
きその おんたけ
まだしろい

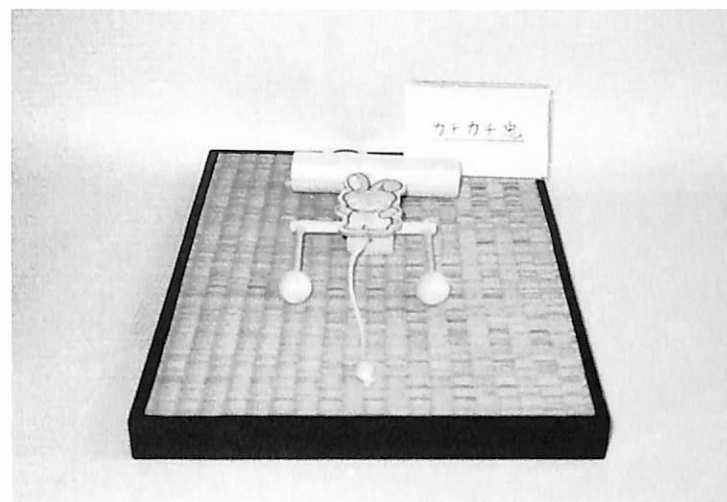
キンギョすくい



糸つり人形



かちかち兔



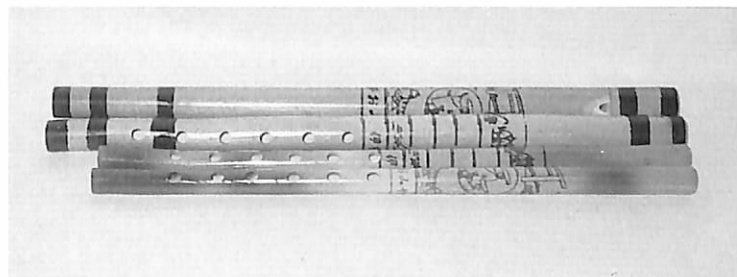
ままごと遊び



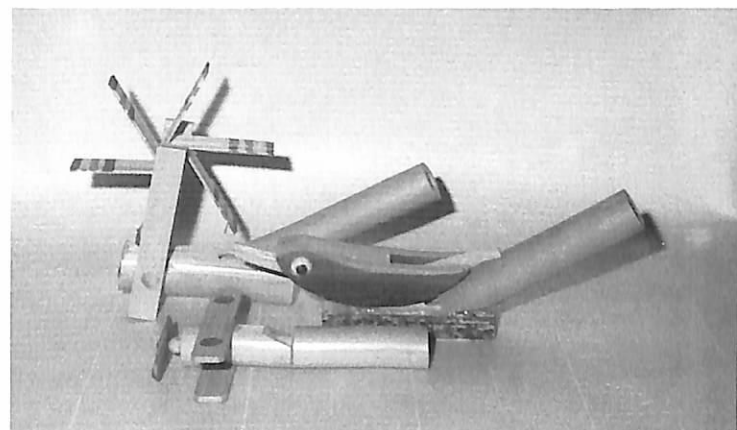
みず遊び



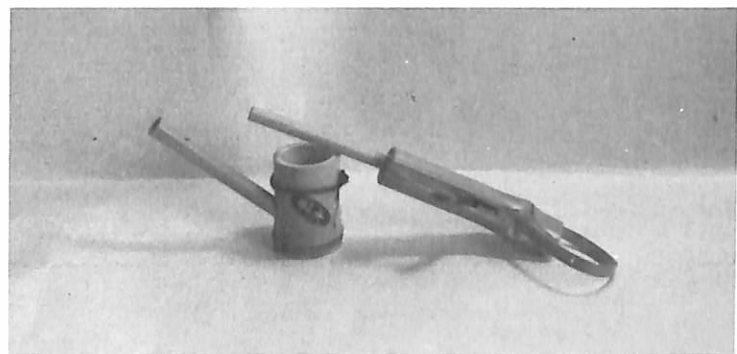
横笛



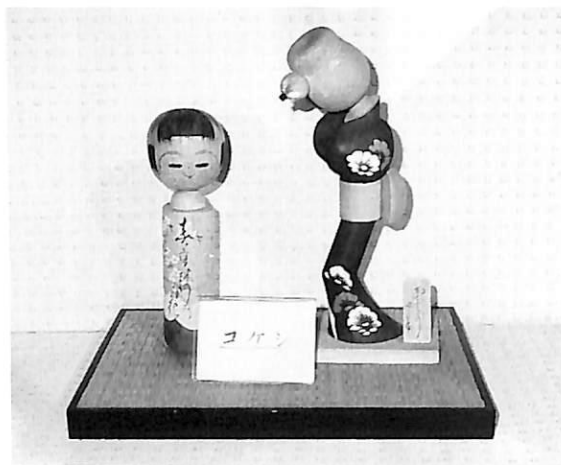
竹笛



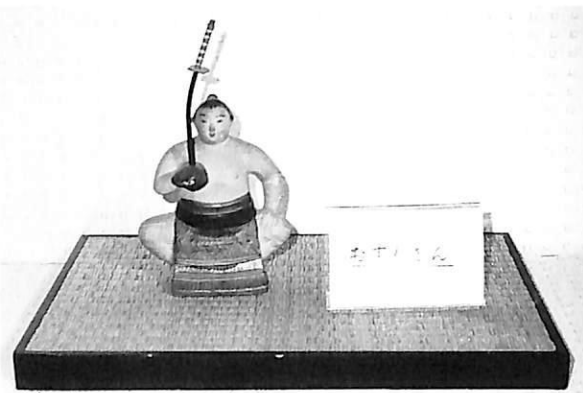
水ふえ



コケシ



おすもさん



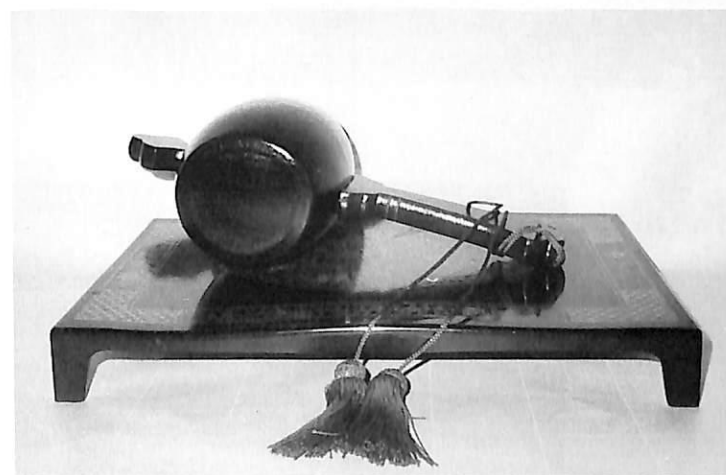
まねきねこ



博多人形



打出の小槌



姫だるま



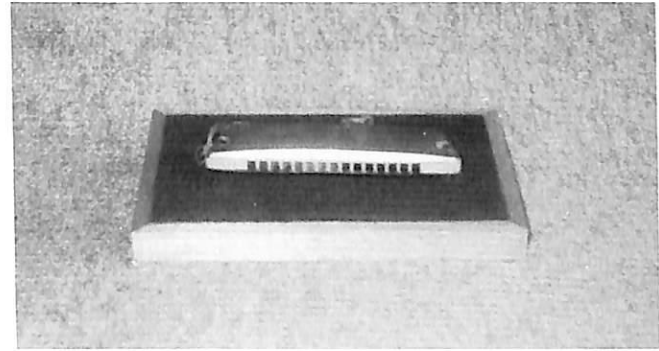
だるま



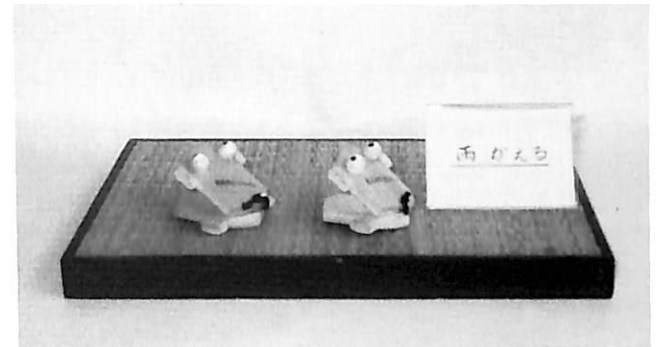
はりこ姫だるま



ハーモニカ

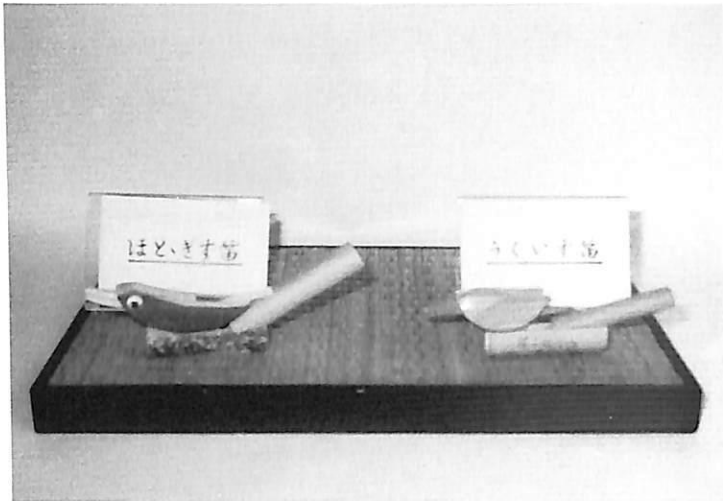


カチカチ

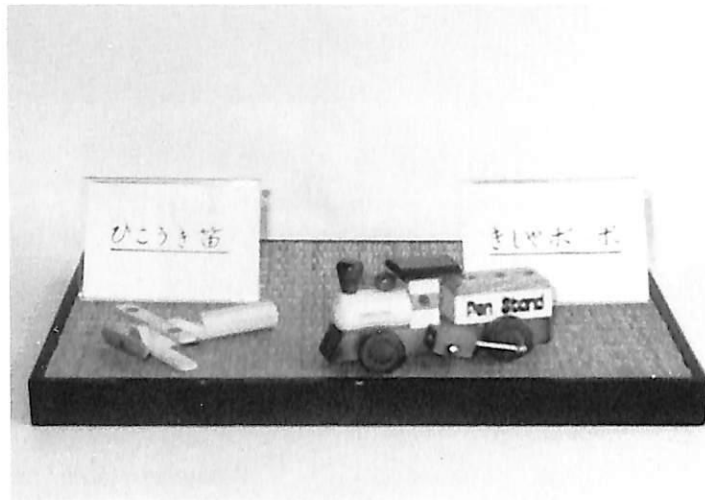


山頭火の句
 ふみわける
 萩よ すすきよ
 笠にとんぼを
 とまらせてあるく
 歩きつつける
 彼岸花咲きつつける

ほととぎす笛。うぐいす笛



飛行機笛。きしゃポッポ



玩具の発達

江戸時代はいろいろな文化の発達とその成就期であったが、玩具もそのほとんどが江戸時代に入ってから発達したものであり、それ以前の時代には、庶民の子供達が玩具で遊ぶとゆうことはほとんどなかったようである。

また江戸時代になって発達した子どもの玩具も正月遊びを中心にしたものから発達普及されていたようである、古くは宮中で貴族の遊び道具であったり、折りや吉凶の占いなど祈念をこめたりしたものが、江戸時代に入って子どもの遊び道具として変化し、各地に普及しその地域の風土の中で育てられていったものも多い。

名古屋市博物館発行の(正月の民族)に依ると、たとえば、凧は中国から伝わり鎌倉時代以降次第に広まり、江戸時代には一般にも定着した、凧揚げによって農作物の吉凶を占う意味が込められていた、この凧揚げが男の児の正月遊びとして流行し定着したのは江戸時代中期の頃と言われている。

また独楽(こま)はすでに奈良時代に中国から流入したものと伝えられ、賭や吉凶の占いなどに用いられた、江戸時代になると多種多様な独楽が作られ、子ども向けの独楽も作られるようになった。

凧と同様に男の児の正月遊びとして定着していった。羽根つきが正月の女兒の遊びとして普及したのは江戸時代で、室町時代は宮中の正月遊びであった、これを胡鬼子(こきのこ)遊びといった。

羽根を胡鬼子といい羽子板を胡鬼板(こぎいた)といった、この胡鬼板を羽子板というようになったのは江戸時代中期の頃とされている、もと羽子板の図柄は、裏に左義長の様子、表にそれを見物する男女をかき、左義長羽子板が基本であり、それを厄よけ、害虫駆除、招福などの護符とする俗信も生じた、羽根つきが子どもの遊びになるにつれて、図柄も変わり羽根つき唄も生まれた。

また正月遊びの中に、かるた取りがあるが、かるたも種類が多くその中の花かるた（花札）は賭博具として平安時代以降に行われていた貝合、花合、を取り入れたもので江戸時代に生れた、藤原定家選といわれる小倉百人一首をはじめ、いろはかるた、狂歌かるたなど多くの種類が江戸時代に生みだされた、もともとかるた、という言葉はポルトガル語の（カルタ）に由来するものである。

現在全くといっていいほど目にする事の出来ない双六は昭和の初期頃までは子どもの正月や冬期の遊びの中にあつた、その双六は奈良時代から平安鎌倉時代にかけて双六として流行したようである。

長久手町郷土史研究会第三部会

中 野 十 四 夫

少年期の玩具

こま

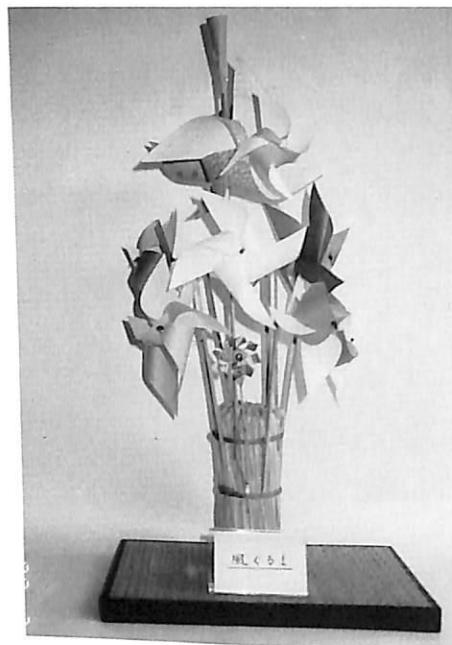


こま遊び

こま遊びの歴史はふるく、大正時代から昭和14・5年頃まで、正月の子供の遊び行事で凧上げ、庄屋けんと共に終日遊だものである。こまの種類は多く大小様々で小さいものはトチの実にヨージをさして作り廻した。小学校4・5年生頃になるとかた木に鉄輪のはまった重量のあるこまで、互いのこまを割り競う遊び行事をよくした。

福岡 鯨 三

風車



田舎まわりのアメ屋さんが
イコを叩きながら唄を唄いアメ
売りにくる、子どもはアメのつ
いた風車を買ってアメをなめなが
ら風車を手に走りまわる。

アメヤさんの唄
アリアエーコリヤエー
アメオ カウコハ シンカラカワイイ
コチャコイ コチャコイ
デンツク デンツク



さし絵

山本鶴善 八十三才

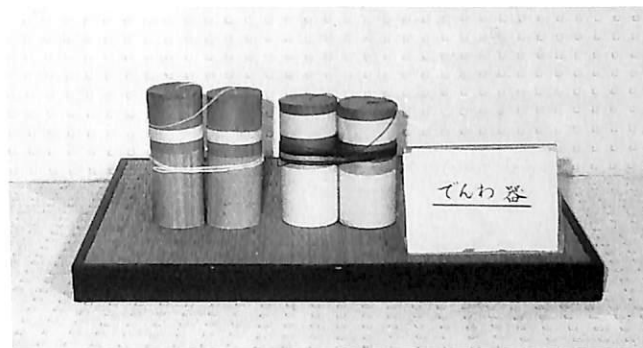
まんげ鏡



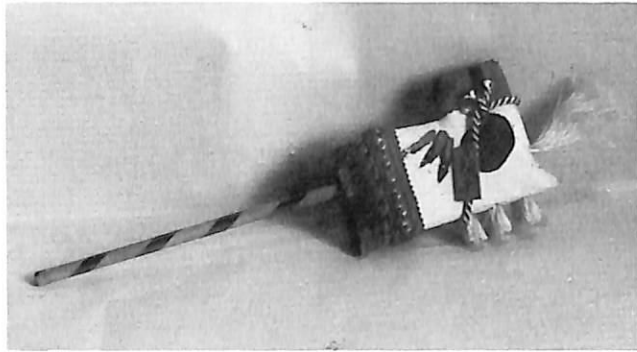
大黒様の言うことにや
一に たいらでふまえて
二で につこり笑って
三で さかすき手に受けて
四つ 世の中ええように
五つ いつものごうとくに
六つ 無病息災で
七つ なにごとないように
八つ 屋敷を広めて
九つ くらでうちたてて
十で とんとんおさまった
十一 まんざい福の神

かぞえ歌 福岡博子選

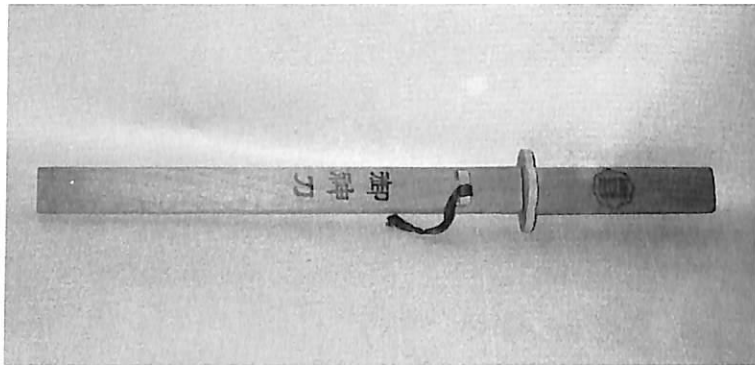
でんわ器



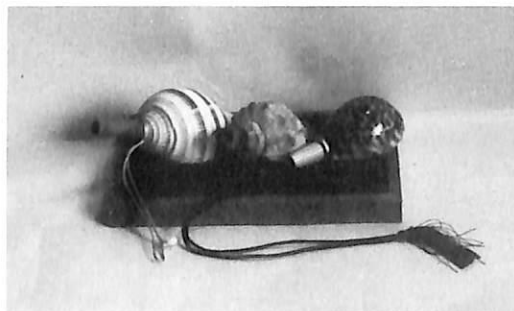
初馬



御神刀



さざえ笛



田草とり歌
あつや悲しや
六月土用にや
水が湯にわく
田の水が

お面



お祭り、縁日などで親にお面をかってもらい
おにごっこして遊ぶ



さし絵

山本鶴善 八十三才

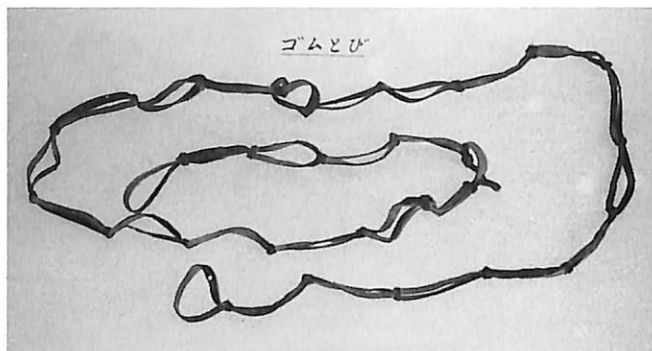
こっぼ

缶詰の空き缶をりょうして考えだしたコッポは簡単なもので、
空き缶の両側に穴を開け荒縄を二本通して下駄のようにはいて
歩き回りあるいは競争をして遊ぶ玩具

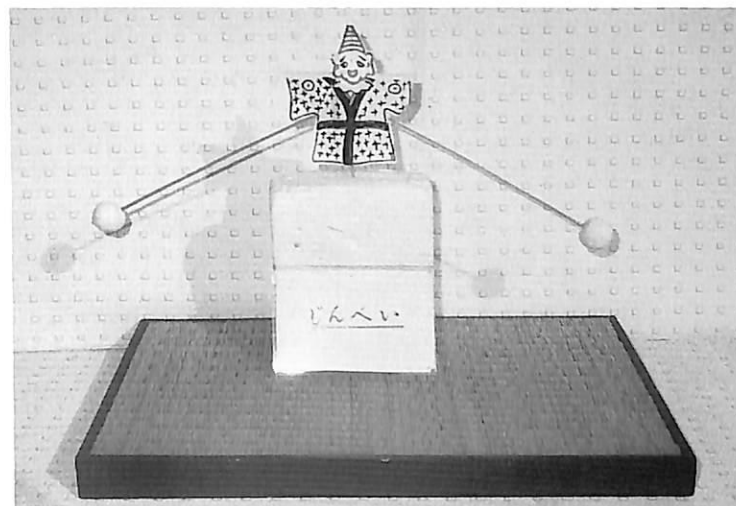


ゴムとび

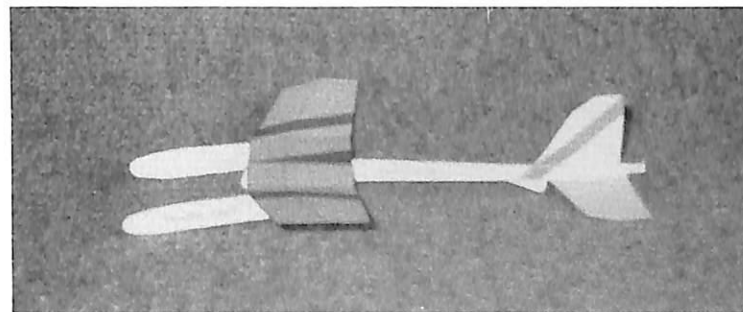
自転車のチューブの廃品を輪ざりにして結び女の子がゴムとび
をし遊ぶ



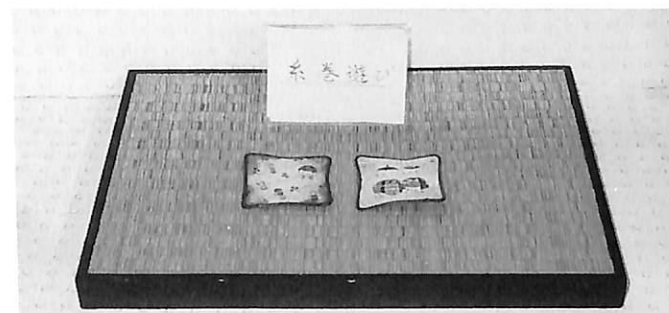
じんべい



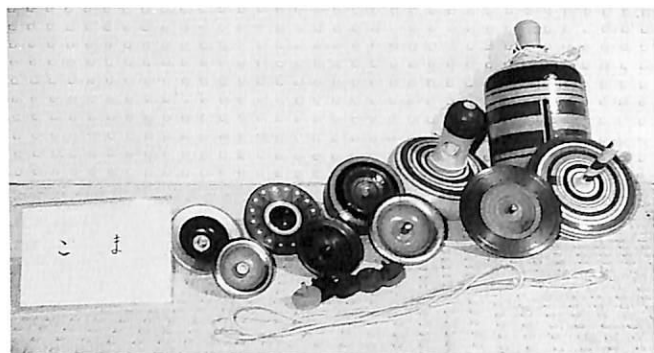
紙飛行機



糸巻遊び



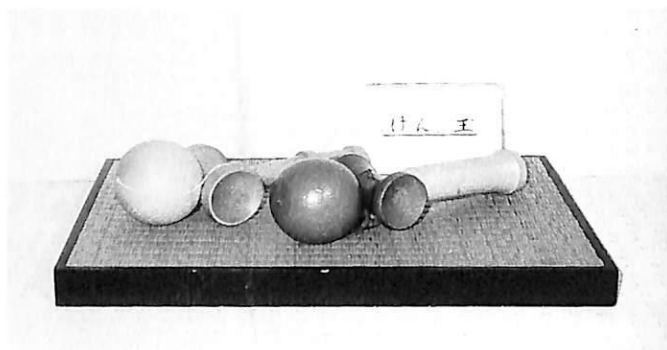
こま



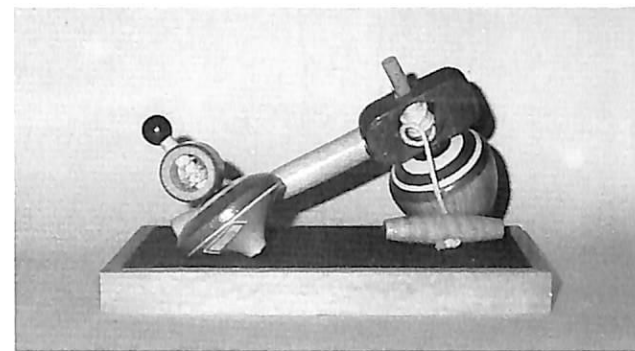
ビー玉



けん玉



こま

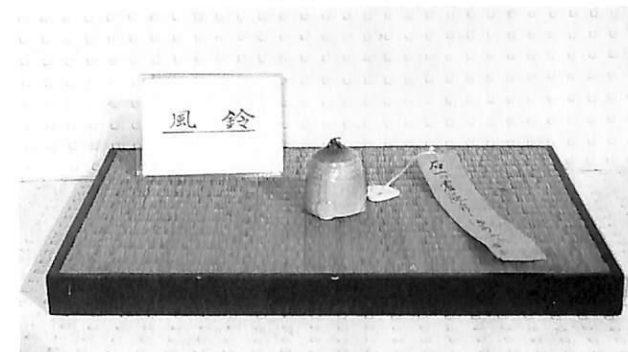


まねきねこ

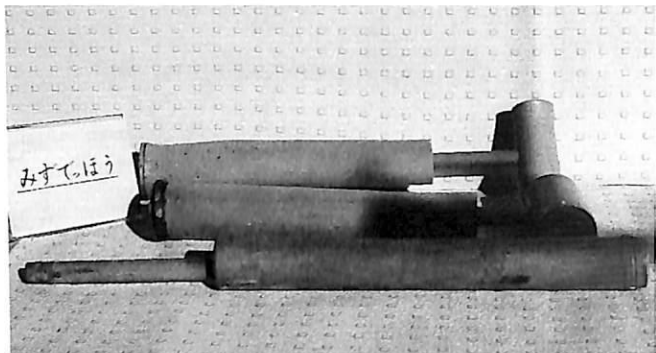


田草とり蹴
あつや悲しや
六月土用は
一番田の草
血のなみだ

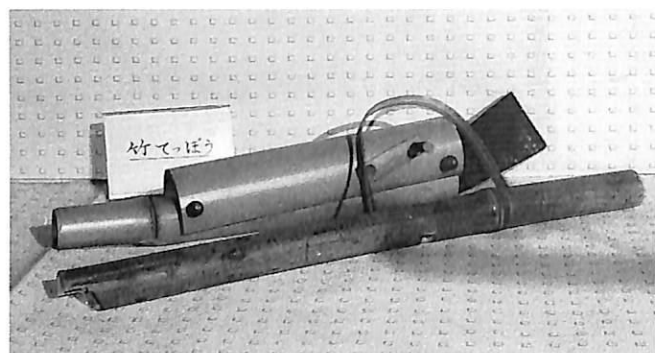
風鈴



みずでっぽう



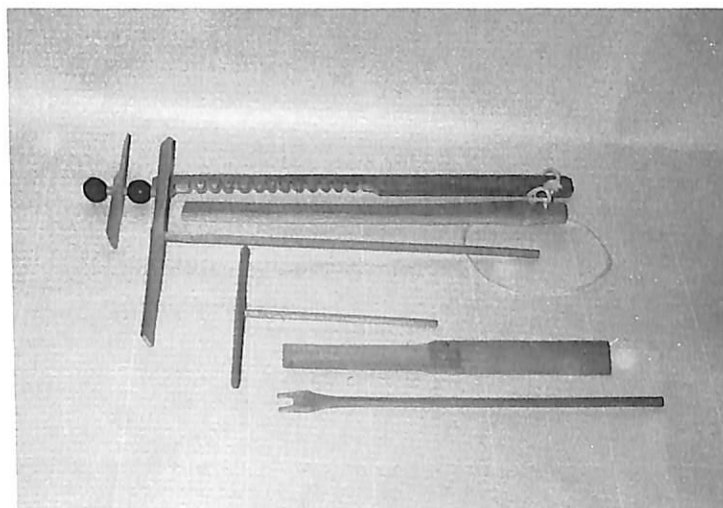
竹てっぽう



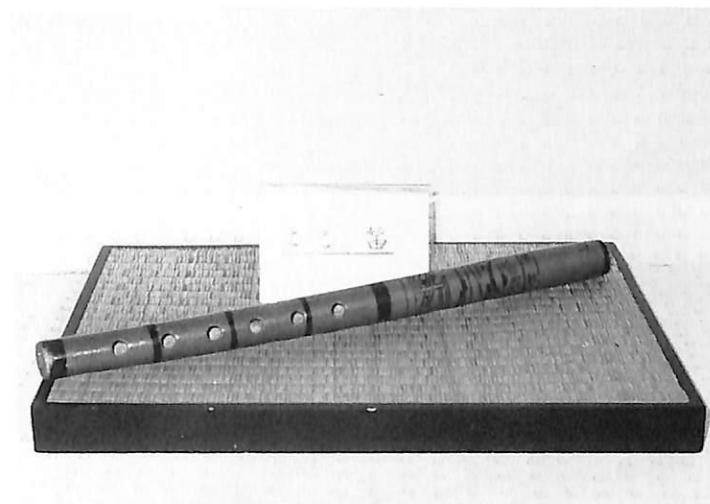
紙てっぽう



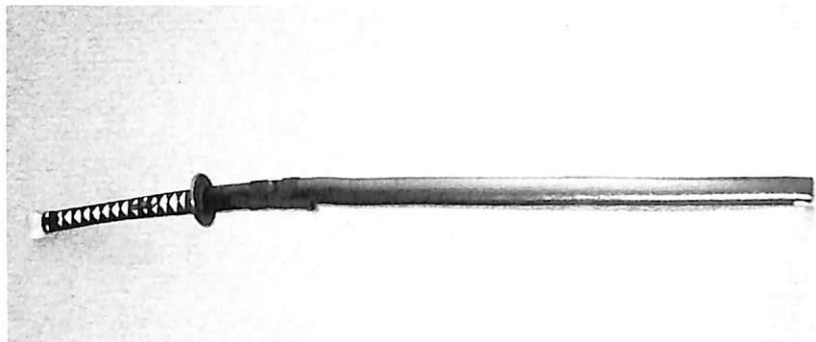
竹とんぼ



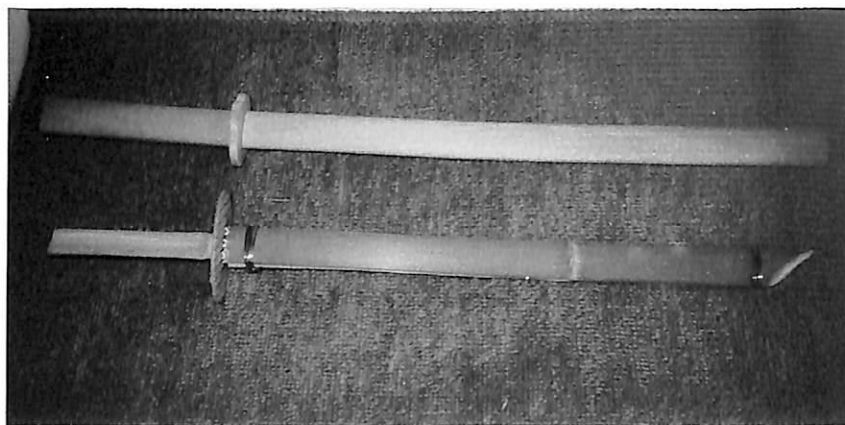
よこ笛



刀



たけ刀、木刀

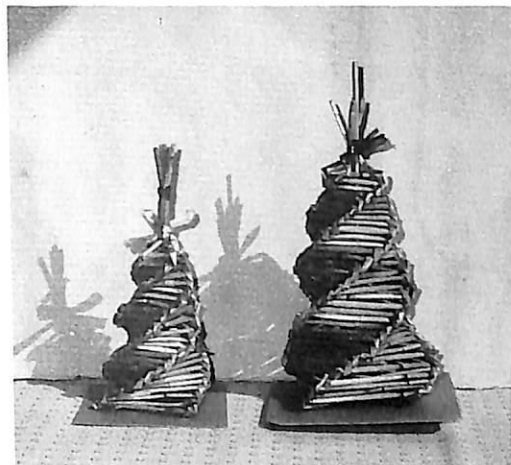


学校が終ると早く家に帰り、学習カバンをそっと家において、山や野に、又は田圃の広い所で、1年生から5年生までぐらい、15人から17、8人ぐらいを二手にわかれて、手には木刀や竹刀をもっていく遊びや戦争遊びをよくした。秋は木登りで柿、くり、むくの実をとり、夏は川で魚とり池での水泳で遊び、冬は凧上げ、庄屋とり、こま廻しが遊びの日課でした。

福岡 鯨 三

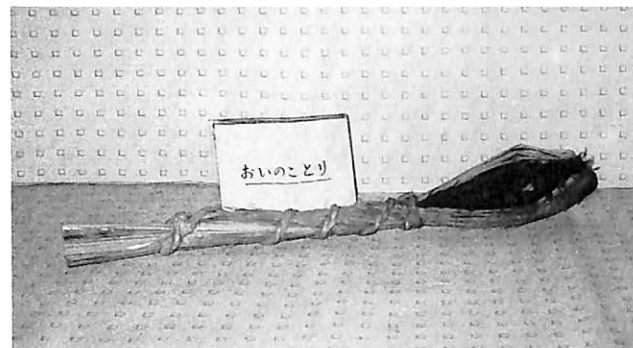
麦わらのギッチョかご

麦の収穫のころ子どもが麦わらをあんで籠をつくりこれにギッチョを入れる。

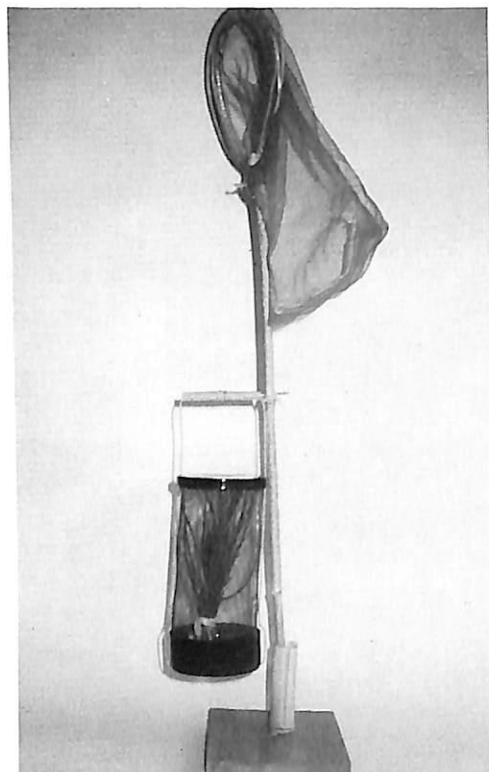


おいのことり

稲藁を二つに折まげしゃもじ型にして、中に杉の小枝をいれて、晩秋の曇空のとき、おいのこが飛びかうのをとる、おいのここいばた(おはぎのこと)やるぞといいながらとる。



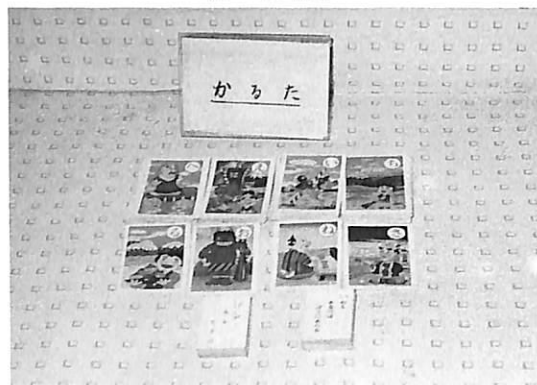
蛍とり



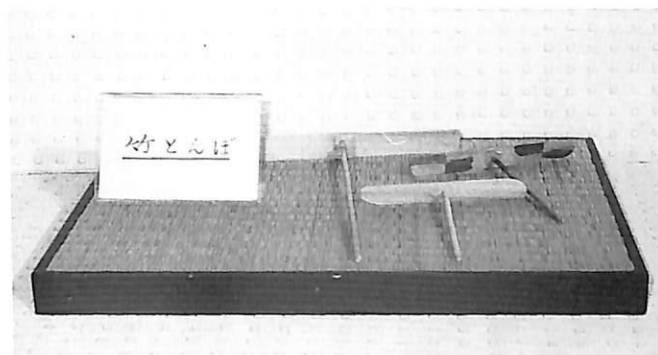
ほたるこい ほたるこい
あっちの水はにがいぞ
こっちの水は甘いぞ
こっちえこい こっちえこい

岩作八景の内
下田の流蛍（白針、五反田）
そらくれて植女かゝへる畦みちを
てらし顔にもとぶほたるかな

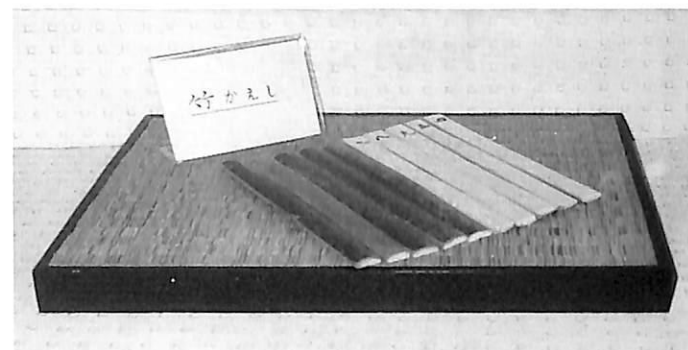
かるた



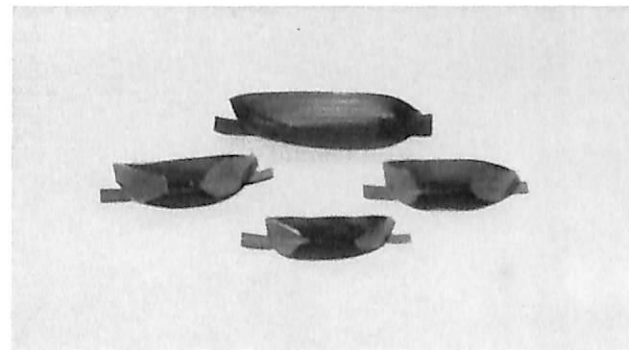
竹とんぼ



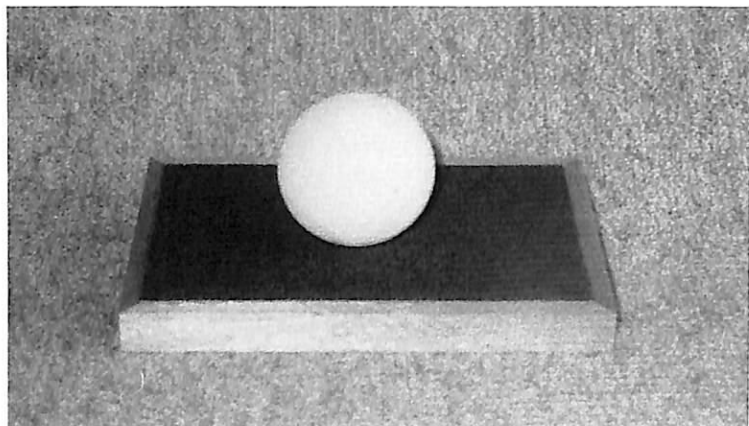
竹かえし



笹舟



ゴムまり

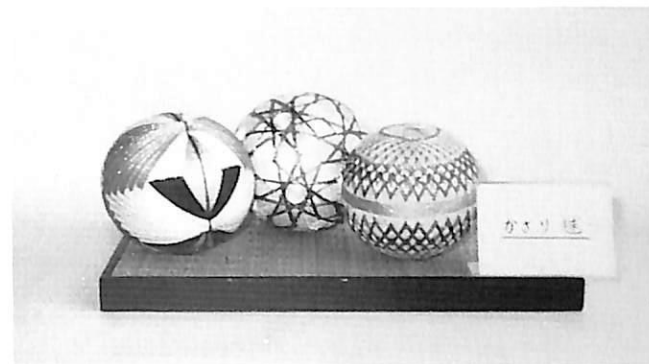


まりつき数え唄

一銭もらって いも買いました
 二銭もらって 肉買いました
 三銭もらって サバ買いました
 四銭もらって シビ買いました
 五銭もらって ゴボウ買いました
 六銭もらって ローソク買いました
 七銭もらって ヒモ買いました
 八銭もらって 針買いました
 九銭もらって くり買いました
 十銭もらって じゅうのう買いました

榎村信枝 選

かざり毬



まりつき唄

大黒様と言う人は
 一に俵をふんまえて
 二でにっこり笑って
 三で盃手に受けて
 四で世の中えいように
 五ついつものごとく
 六つ無量息災に
 七つ何事ないように
 八つ屋敷をひろめて
 九つこらで家建てて
 十でとうとう納まった

山本鶴善 選

ゴム毬



よらめ

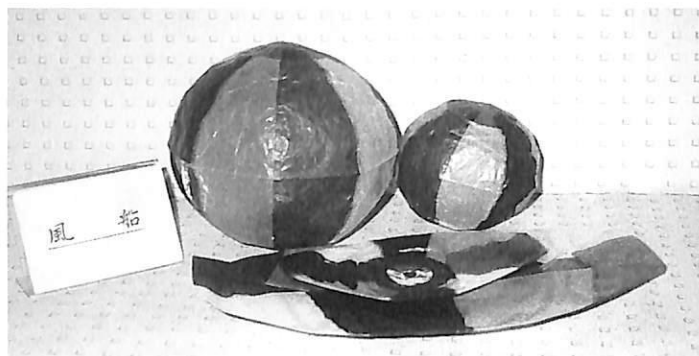


うすひき歌
ひきにきたもの
ひかせておくれ
やぶれはだぎの
そでなりと

をり紙

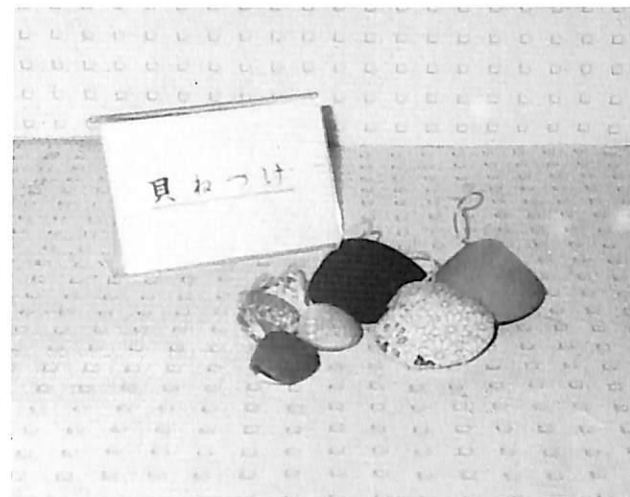


紙風船

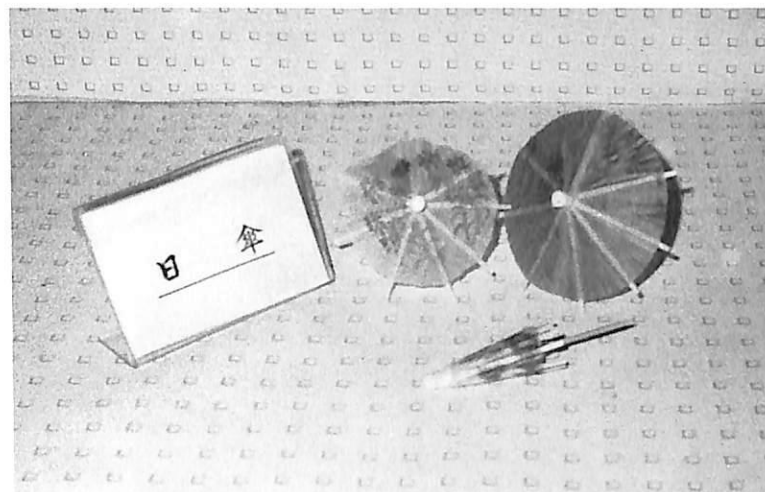


貝ねつけ

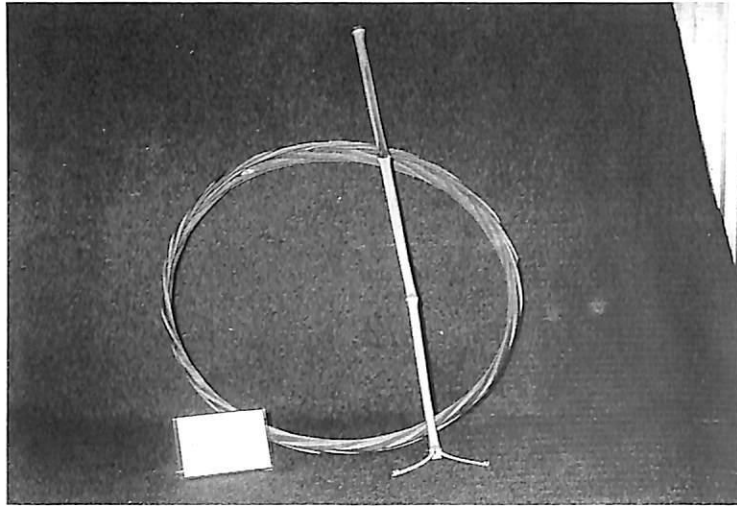
貝ねつけは蛤、あさり、しじみの殻をふたつあわせ色とりどりの布ぎれで包み縫いして糸を通して腰にぶらさげる



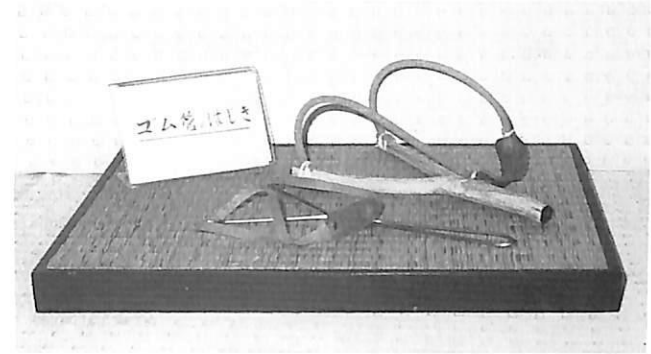
日傘



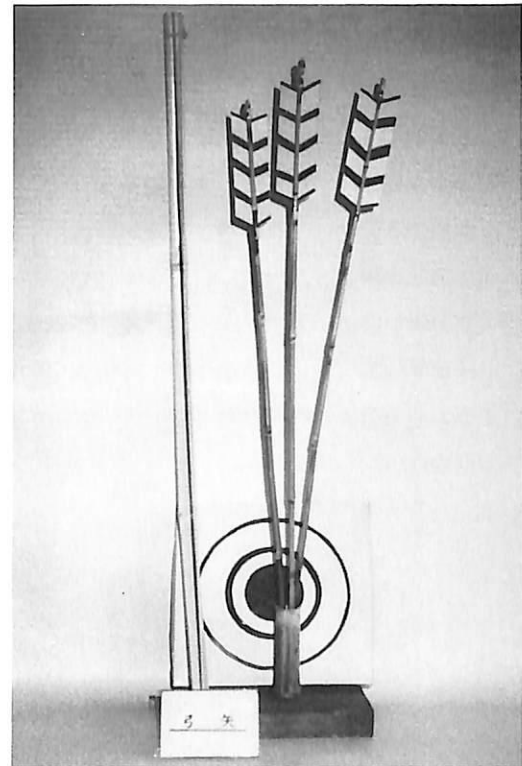
たが廻し



ゴム管はじき



弓 矢



さし絵

山本鶴善 八十三才

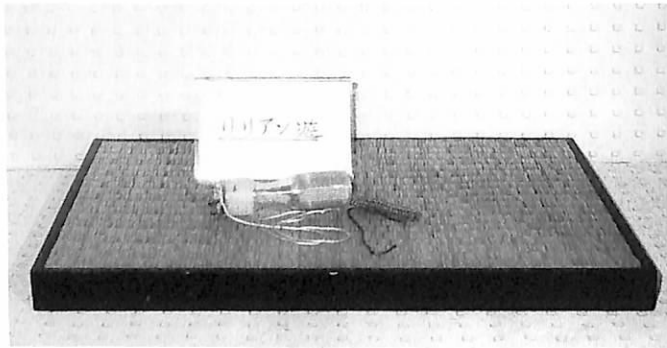
おじやみ

おじやみは10個近くの数で2人か3人で交互に歌を歌いながら遊ぶ



お一つ落として
 お一つ お一つ おろして おさら
 お二つ お二つ おろして おさら
 お三つ お三つ おろして おさら
 おてしやぎ おはさみ おはさみ おろして おさら
 おつりこ おつりこ おろして おさら
 おつりこ おつりこ おろして おさら

リリアン遊び



子供の凧あげの想いで

子供の凧あげ行事は どの村でも毎年 お正月頃になると子供の遊びとして、寒い冬空の下で上げたもので 大正時代より昭和10年頃まで その様な農村風景が多くあった。

凧上げは男の遊び行事で 子供の遊びばかりでなく 時には大人の人も一緒になってよく上げたものである。凧には大小多くの種類があって「フワ凧 センス凧 福助凧 アブ凧 角凧」等色々と呼称したもので、又 凧が出来上がると その凧の表面に書や絵を大きくかいた。書は「風 竜 天上」等と筆太に大書した。絵は「竜 福助 ハンニャ」等の絵を 大きく美しく絵がいたものである。1m以上にものなる大凧は 上にうなりをつけて 下には10m以上にもなる長い太縄の尾を 左右につけて上げたもので 強い西風の朝に 大人が2、3人がかりで 上げたものである 大空高く 100m以上も 伊吹おろしをまともに受けてよく上がった。

私も7、8才頃から凧上げに興じて遊んだ。近所隣の悪童2、3人と冬の寒い朝から凧上げをした 家の西から広い 広い さら田が 秋の稲刈を終ったそのままの風景で 西に広く続く 通称田中の元屋敷の田圃で西に城ノ内の竹藪があって その西はるかに伊吹山の連山が 白く連らなっている。春は一面のレンゲ草の花盛りで美しいが 冬の田圃は寒く 強い伊吹おろしの西風をまともにうけて 田の中を西に走り廻ってよく凧を 上げたものである 子供の頃の想いで。

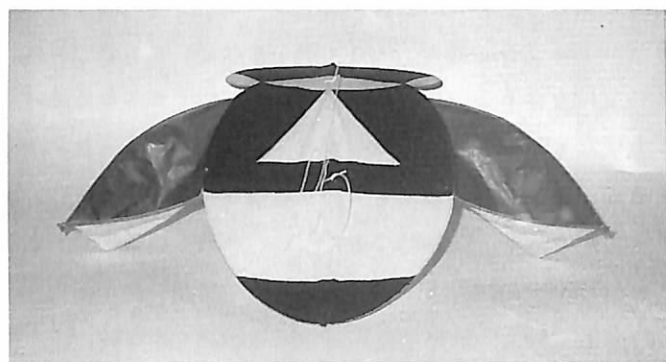
昭和63年10月1日

福岡 鏡三 書

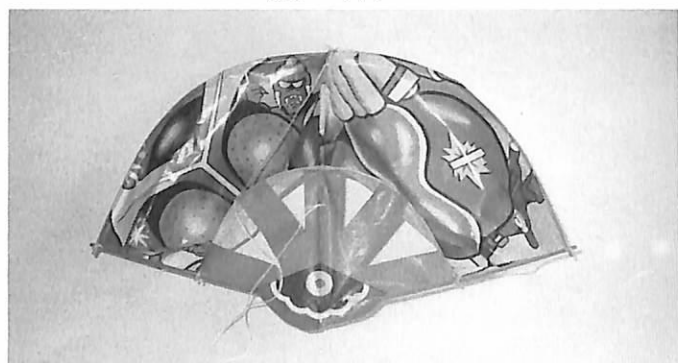
福助 凧



あぶ 凧



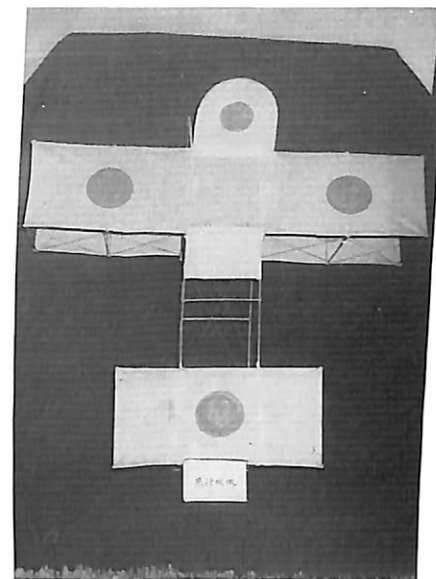
扇 凧



武者 凧



飛行機 凧



奴 凧



羽子板

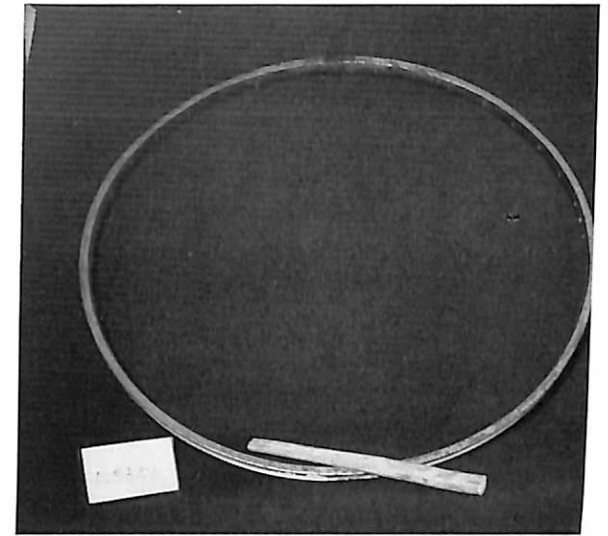


羽根つき歌
 正月ちゆうもん ええもんだ
 あかいべべ着て羽子ついて
 雪の白さのまま食って
 木っ端のようたとそえて



たがまわし

古自転車のリムを1本の木でまわして遊ぶ



木の間より もりくる月の
 かげ見れば
 心づくしの
 秋はきにけり

(古今集)

たがをまわして遊んでいるところ



秋、秋の長雨
 うめばちそうの花
 秋冷の山気の中に
 りん然と咲く白い花
 少年はちかった
 この花のように
 生きようと

(中尾彰詩集)

さし絵

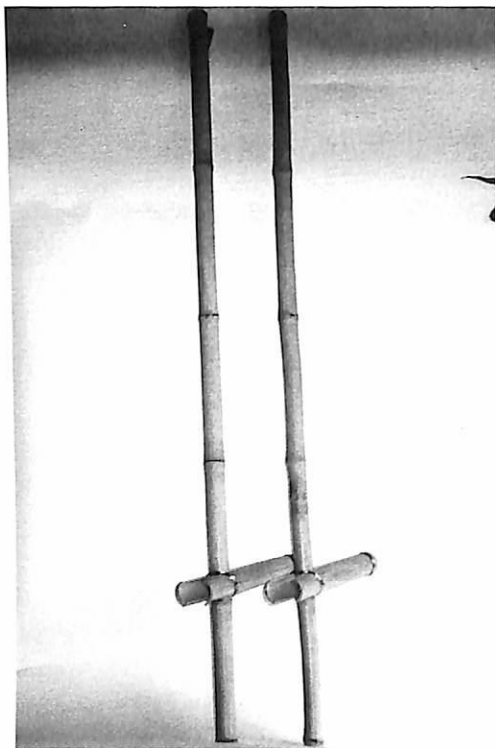
中野十四夫

さし絵

山本鶴善

八十三才

竹馬遊び



まさかりかっいで金太郎
熊にまたがり角力のけいこ
ハッケヨイ ノコタ
ハッケヨイ ノコタ

さし絵

山本鶴善 八十三才



長中校誌より

鏡の中の私 一F 福岡 美香

中学生になった私
初めてセーラー服を着て鏡の前に立ってみた。
ちよっとぶかぶか長めの袖。
たぶっと大きくて太めのスカート。
鏡の中でそうっと自分の顔を見た。
「ふーん。これが中学生の私か。」
鏡の中の私の顔が少してれていた。
それから、ちよっと背伸びして
きどって歩いてみた。
「やったあーん」
今日からあこがれの中学生だ。

羽子板



長久手中学校校誌より
第一回文芸作品コンクール入賞作品
最優秀
山の夜友と語らうひとときに母の面影浮かぶ
ことあり
三E 長岡さおり

将棋



正月ちゅうもの いいものだ
ケッチベベきて 下駄はいて
下駄の歯のような餅くって
コッパのようなトトそえて

小倉百人一首



花札



母の心

3 C 母

(長久手中学校校誌より)

卒業が間近に迫ってきたせいか、中学入学以来、子供というものは随分成長するものだと、つくづく感じる毎日です。

小学校の6年間に比べると、この3年間は、親が想像する以上に、悩んだり、傷ついたりしながらここまで来たのだらうと思います。

さて子供に対して自分は、親として同じように成長してきているのだろうか、自問自答して、答が出ない自分を恥じ、逆にどんどん追い越されてしまっているのではないだらうかと思ったある日、新聞の一行が眼にとまりました。

「子供のおかげで自分の知らない世界が広がっていくのであって、毎日を新鮮に生きていける。子供も4歳なら、親としても4歳」

あー、私の感じていることが、この最後の一行に、そのまま集約されていると思いました。

21世紀の未来にむかって、息を弾ませて、進んでいく子供たちと共に、私も親として、同じように成長していく努力をしなくてはと願う今日この頃です。

おわりに

今年は例年になく夏の盛りに雨が多くて、不順の天候がつづき、はや9月も中ばで初秋の候となりました。

210日も無事に終り、稲の穂先も豊かに、岩作の警固祭も上るようです。長久手町の郷土誌も、長久手の方言、長久手の芸能、長久手の石造物と発刊して回を重ねて、今回は、長久手の玩具を発刊することになりました。大正時代頃より昭和20年頃までの戦前のもものが多くて、日比野部会長さんの格別な御労苦に感謝しますと共に、山本鶴善さんの御骨折りや、中野十四夫、浅井千鶴子さん外多くの会員の皆様の調査、研究の成果、発表に心から感謝を申し上げて、その御労苦にたいし、御礼申し上げます。また本誌編集に当り、不備の点多く他日の御叱声を賜りますようお願い申し上げます。

昭和63年10月1日

長久手町郷土史研究会

会長 福岡 鯨 三

発行年月日	昭和63年10月31日
発行	長久手町郷土史研究会 愛知郡長久手町大字岩作字城の内60の1
印刷	東海印刷株式会社

長久手町郷土史研究会會員名簿

青	山	清	治
浅	井	金	徳
浅	井	鹿	雄
浅	井	千鶴	子
浅	井		広
石	崎	義	雄
伊	藤	高	義
尾	埜	和	江
加	藤	正	時
加	藤	明	子
小	林		元
近	藤	良	興
寺	島	幸	一
寺	島	藤	夫
川	本	勝	美
寺	島	初	美
中	野	十四	夫
田	中	かねよ	
日	比野	義	信
福	岡	鯨	三
楨	村	信	枝
水	野	秋	金
水	間	松	枝
山	本	鶴	善
与	語		宝
与	語	藤	一
与	語		保

長久手町中央図書館



00870074

A 7